

2022年3月11日発行

「南無阿弥陀仏」で終わる物語
—玉里文庫本古筆『源氏物語』のために（1）

高 木 信

相模女子大学紀要 VOL.85（2021年度）

「南無阿弥陀仏」で終わる物語 —玉里文庫本古筆『源氏物語』のために(1)

高 木 信

A story ending with “南無阿弥陀仏” ; For Tamasatobunko “The Tale of the Genji” (1)

Makoto TAKAGI

【要旨】 玉里本『源氏物語』「若菜下」巻の末尾には「南無阿弥陀仏」と記される。この現象を室町時代物語との共通性として捉えた。紫式部墮地獄説、紫式部観音説を經由して、『源氏物語』的なものを、仏教的イデオロギーのなかに囲い込んでいく現象の一端を考察した。

キーワード：南無阿弥陀仏、玉里本『源氏物語』、室町時代物語

〇、玉里本『源氏物語』は

1100年頃に成立した『源氏物語』はさまざまな異本を生みだしながら、男性貴族の正典（キャンオン）となっていく。そのなかに、鹿児島大学附属図書館所蔵が所蔵する玉里文庫本の古筆『源氏物語』もある（以下、玉里本とする）。鎌倉時代から南北朝に書写されたと考えられるものである。「空蟬」「花宴」「賢木」「須磨」「関屋」「松風」「玉鬘」「初音」「野分」「藤裏葉」「若菜下」「夕霧」「匂宮」「紅梅」巻の全十五帖の取り合わせ本である。玉里本については、近年、武藤 [2018a・b] によって再調査されている。

本稿は、玉里本の「若菜下」巻の終わりに、二行ほど空けて本文と同筆で「南無阿弥陀仏」と記されていること（武藤 [2018a]）について考察するための補助線である。

巻末に「南無阿弥陀仏」と記されてることがあるのは、国冬本『源氏物語』である。「桐壺」巻の末には、「是見人々南無阿弥陀仏十遍」、「朝顔」「少女」

「玉鬘」「若菜上」「柏木」「鈴虫」「匂宮」巻などの末には「南無阿弥陀仏十遍」という記述がある。これはテキストの語る主体の発話ではなく、筆録者が加筆したものであろう。いわゆるパラテキストとして位置づけてよかろう（ジュネット [2001] 参照）。テキストを縁取り、ある種の位置づけ、意味づけを享受者にもたらず記号として「南無阿弥陀仏」があるということだ。

岡寫 [2010] はこれを〈紫式部墮地獄説〉とかかわっているのではないかと指摘している。

一、狂言綺語は

〈紫式部墮地獄説〉は、嘘偽りの言葉を書き連ねた（『源氏物語』という虚構（狂言綺語））を書いた紫式部が、その罪のために地獄に墮ちるというものである（高橋 [1979]、高木 [2005]、蟹江 [2001]、深澤 [2012] など参照）。

嘘偽りの言葉からなる「物語」を読むことが往生

の妨げになるという考えは、『源氏物語』成立直後からあった。『更級日記』の作家は、少女時代に『源氏物語』を耽読しながら、女人往生を保証する法華経を読むよう諭される夢を見たとする。『源氏物語』を読むことの罪悪感が明確に罪としてきしているのが『宝物集』である。

『宝物集』巻第五には、紫式部が虚言を弄んだことで地獄に墮ちたとする説話が収められている。

ちかくは、紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、人の夢にみえたりけりとて、歌よみどものよりあひて、一日経をかきて、供養しけるは、おほえ給ふらんものを。(二二九頁)

ほぼ時期を同じくして、一一七〇から一一八〇年代に成立したと考えられている『今鏡』や『源氏一品経表白』には、紫式部が墮地獄したのは、式部が観音の化身であるとする。『今鏡』を引用しておこう。

唐土に白楽天と申したる人は、七十の巻物をつくりて、詞をいろへ、譬へをとりて人の心をすすめ給ふなど聞え給ふも、文殊の化身とこそは申すめれ。〔中略〕女の身にて、さばかりのこゝとを作り給へるは、ただ人にはおはせぬやうもや侍らむ。妙音・観音など申すやむごとなき聖たちの女になり給ひて、法を説きてこそ、人を導き給ふなれ。(下一五九二頁)

室町時代になると、謡曲《源氏供養》は、石山寺の観音菩薩が紫式部の姿をとってこの世に現れ、衆生を救うために『源氏物語』を書いたとしている。

深澤〔2012〕は、墮地獄説は観音説が発生したから逆算的に生産されたと興味深い逆説的な説明をしている。ただし、『平家物語』で悪行人とされる平清盛が「慈恵僧正の再誕の再誕なりと、人知りてンげれ」(巻第六「慈心房」・①—p.460)とされ、「天台の仏法護持のために、日本に再誕」(①—p.459)したのだとするテキストの論理構成から見ると、墮地獄説からパラドキシカルに〈聖性〉が付与されるところを考えるのが穏当ではあろう。

二、紫式部伝承は

このような時代状況を踏まえながら、物語末尾に「南無阿弥陀仏」と刻み込む心性について考えて行

きたい。室町時代に謡曲《源氏供養》が作られていくように、紫式部伝承も〈物語化〉されていく。たとえば、室町時代物語「石山物語(明歴刊本)」の最後を見よう(石山寺縁起の最後(「石山物語」第四冊)に「紫式部の巻」(内題)として「紫式部伝承」が載せられている)。

されば、ひかるけんじの名目、五十四帖に、わかつていへども、大数の名は、三十七巻なり。これ、大日の三十七尊をひやうせり。

そのまきそのまきに、かうしよく、ゆふゑんの、たはふれごとを、かきつらねたりと、いへども。又、無上ほたいの、たへなる、ことほりを、ふくめり。

しかれば、諸佛の御内証にも、かなひて、ぶつくわを、せうぜしめんといへとも、末代の衆生に、ちぐのえんを、むすばしめ、ずいきのくどくをもつて、げだつのいんと、なさしめんため、はうべんにて、いまこの大会を、おこなはしめ、諸人のさんけいを、すすむる也。

まことに、有がたき、御りしやうにて、慈眼現衆生の、御せいぐわん、たのもしき御事也。

(2—p.249)

他には、「源氏供養草子」「源氏供養物語」という室町時代物語も存在している。「源氏供養草子」では、

南無四方極楽弥陀菩薩、ねがはくは、証言ききよのあやまりを、ひるかへして、紫式部、六しゆの苦けんを、すくひ給へ

南無一乗妙典、当来たうし弥陀自慈尊、てん法りんの、えんとして、これをもてあそはん人、ことごとく、安養の浄利に、むかへ給へ

(4—p.379)

と、紫式部の供養がなされている。

「源氏供養草子」も同じで(異本関係なので当然だが)、「願は、西方極楽世界、弥陀善逝、狂言綺語のあやまりをひるかへして、紫式部か六趣の苦患をすくひたまへ、南無一乗妙典、当来導師、弥勒慈尊、転法輪を、ゑんとして、是をもつて、あそはむ人、悉、安養浄利に、むかへ給へ」(4—pp.384-385)とされている。

三、『源氏物語』の翻案テキストは

『源氏物語』はさまざまに引用され、物語取りをされ、その後の物語文芸に大きく影響を与えたことは言うまでもない。

謡曲に翻案されたもので現行曲としては、謡曲《葵上》《浮舟》《落葉》《須磨源氏》《住吉詣》《玉鬘》《野宮》《半蔀》《夕顔》の九作品がある。

そのなかで、たとえば《葵上》は生霊＝怨霊となった六条御息所がシテとして登場してくるが、最後はワキである僧によって成仏していく。能が死者を無理矢理に怨霊化し、往生させるシステムであることは、高木〔2020〕などで論じたが、ここでも六条御息所は怨霊として明確に身体化され、鎮魂されていく。

このような六条御息所と葵上とを、「干豆腐」と「蕎麦」とに置き換え（擬物化し）た室町時代物語の翻案物語「六条葵上物語」でも、その末尾は、

僧は夢のたたちをたしかにおほへてかたりけると又物かたりし侍るをかやうにかきつけ侍るなりきやうけんきよなから御覧せん人々は御経よみ念仏申て三界はんれゐ六親けんそく草木国土しつかい成佛とゑかうし給ふへし (p.119)

と閉じられる。登場人物(?)たちが往生を願うテキストが、テキストを読む人々に読経、念仏をすることを勧めるのである。

四、南無阿弥陀仏で終わる物語は

さて、このように『源氏物語』の翻案テキスト、源氏供養を物語化したテキストが仏教的イデオロギーのなかにあることを見てきた。

また、室町時代物語へと翻案されたものも例外ではないことが確認できた。

以下、【表1】『室町時代物語大成』に採られているテキスト群のなかで、筆録者（あるいは筆録者を装っている主体）が、玉里本や国冬本のように念仏（南無阿弥陀仏）でテキストを閉じるものをピックアップした。【表2】はもう少し広く、「文」のなかに念仏が書き込まれているものを一覧にしたものである。

これらの表をみると、玉里本や国冬本の「南無阿弥陀仏」という書き込みが、室町時代的なテキストの仏教的心性を持ったものであることが見えてくるのではなかろうか。

※ ※

室町時代物語の末尾に置かれる仏教的イデオロギー的な言説一覧は別稿を用意している。

【表1】『室町時代物語大成』（角川書店）所収のテキストで文末が「南無阿弥陀仏」で終わるもの

| 通番 | 作品名 | 物語末表現 | 巻数 | 頁数 | 段 |
|----|------------|---|----|-----|----|
| 1 | 阿漕の草子 | いせの海、あこぎが浦に、いくあみの哥、いにしゑより、おほく申事なり 此よしは、所の翁、山内の弥次が、申けるまま、聞とほりかいて、京に帰りつきけるまま、哥よみて、右府の御点にあひぬ いせの海、あこぎが後の、蓮のうてなは南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛 | 1 | 389 | 上下 |
| 2 | 愛宕地藏物語・古写本 | 此さうしを見ん人、ちさうのみやうかう、もしは百へん、もしは廿四へん、となへて、ほうかひしゆしやう、ゑかうし給ひ候はは、そのけちゑんによりにて、わか身も、ほうかよくほうかよく、しんすへし、 <u>なむあみたふつなむあみたふつなむあみたふつ</u> | 1 | 491 | 上 |

| | | | | | |
|---|--------------|---|------|-------|----|
| 3 | 伊豆國翁物語・天正写本 | されとも、人間を放れ不、佛けなければ、恋地を便として、佛道に入しむ 去れは、誰も僣慢の心を翻して、一筋に佛を敬ひ、神を崇め、僧を供養し、君に使へ、民を憐み玉ふへし在世発得の夕部には、切利天に登り、一念随喜の念佛は、遮那の妙行に越たり、狂言たりと申せ共、世の理を書置き侍る也、不可有疑、 <u>南无阿弥陀佛</u> | 2 | 311 | 上下 |
| 4 | 岩竹・奈良絵本 | 是を御らんする人々は、かりそめに、女房よひける共、やうしんして、よひ候へと、むかしも、かやうの大事、ありけるかと、おもひいたせよ、人人や <u>南無あみたふつ南無あみたふつ</u> | 2 | 439 | 下 |
| 5 | 秀祐之物語（古写本） | この、ことわりを、よくこころゑ、しう、おや、ししやうなどに、かうかうにあらん、ともからは、むかしいまとてへたてなし しよてん、三ほうの、かこあつて、今生、後生、ともに御たすけあるへき事、うたかみあらず、候はんなり、これにつけても、 <u>南無大慈大悲観世音ほさつ南無大慈大悲観世音ほさつ</u> | 7 | 22~23 | 上下 |
| 6 | 為盛発心因縁集・天正写本 | 悪人誘引の趣、顕然なれば、善悪の凡夫、たれか、浄土にのみをたたん、滅罪生善の秘法、弥陀の名号には、しかし、諸衆、声をはけまして、念佛すへし、 <u>南无阿弥陀佛</u> (漢字カタカナ交じり文) | 9 | 123 | 上 |
| 7 | 橋姫物語・絵巻 | たれゆへに、そこのみくつと、なりにけむ、猶もこふらし、宇治のはし姫 <u>南無阿弥陀佛、さもうらめしく、くちおし、南无阿弥陀佛南无阿弥陀佛、</u> | 10 | 315 | 上 |
| 8 | 大佛くやう・奈良絵本 | <u>なむあみたふつ</u> | 補遺 2 | 149 | 上 |
| 9 | 天神御本地・卷子本 | されはにや、かさ木の上人は、人目を忍て、夜半、参詣給けり、一天四海の主、九民百黎乃拙も、首を傾、誠を致して、しかも祈なり 今生一期の、栄花をいやは、深谷の、草の庵に衣をそめ、上品蓮台を傾、万人、観音の来迎に預らんと思は、誰か、北野の天神に、申さらん、 <u>南無威徳大自在天神北野</u> | 補遺 2 | 345 | 上下 |

【表2】『室町時代物語大成』(角川書店)において、物語末尾の表現に念仏があるもの。語り手が語っている物語内部に念仏があるなど、判断が難しいものは採らない。

| | | | | | |
|---|------------|---|----|-----|---|
| 1 | うばかは・奈良絵本 | これすなはち、大し大ひの御しひなり、これを御らん給ふ人は、 <u>なむ大ひ、くはんせをんほさつと</u> 、三へん、御となへあるへく候、けんせあんおん、こしやうせんしよ、うたかひなし | 2 | 557 | 上 |
| 2 | 鉢かづきの草子・刊本 | このものがたりを、聞人は。つねに、くわむおんの、みやうがうを、十へんづつ、御となへあるべきものなり <u>なむ大じだいひくわんぜおん菩薩</u> たのみても、なをかひありや、くわんぜおん、二世あんらくの、ちかひきくにも | 10 | 377 | 下 |
| 3 | 法妙童子・刊本 | 此さうしをよむ人は、たとへ、けむどんほういつの身なりとも、正直にして、一時のくけんを、のがれ給ひ、ましてや、心あらん人は、今生にては、おやかうおやかうの、身と也て、じんぎれいちしんを、本として、下そん下ぞんに至までも、ゑいぐはの家とさかへ、みらいにしては、ごくらくじやうどの上ほん上しやうの、れんだいに、むまれ給ふ事、何のうたがひか、あらざらん 只一声にても、みだの、みやうがうをわすれさせ給はずして、南無阿弥陀佛、あみた佛と、ぶつみやうを、となへさせ給ひて、かりの、ともなかひたる、もろ人にも、心をゆるし、何事にても、打とけかたる、誠のともと、いひやせんと、かたりつたへ侍りけり | 12 | 394 | 上 |

【参考文献】 (初出→実際)に参照した文献の順に示した。

岡冨久子 [2010]:『源氏物語写本の書誌学的研究』(おうふう)

蟹江希世子 [2001]:『源氏一品経供養とその背景—院政期女院文化圏の一考察—』(古代文学研究会「古代文学研究 第二次第10号」)

ジュネット、ジェーラルル [1987→2001]:『スイユーテキストから書物へ』(水声社)

高木 信 [2005→2009]:「建礼門院の庭—『源氏物語』を読む女」(『死の美学化に抗する『平家物語』の語り方』青弓社)

高木 信 [2020]『亡霊たちの中世 引用・語り・憑在』(水声社)

高橋 亨 [1979→1982]:「狂言綺語の文学—物語精神の基底」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会)

深澤 徹 [2012→2021]:「狂言綺語へのあらがい—『更級日記』から『源氏一品経表白』をへて『無名草子』へ」(『日本古典文学は、如何にして〈古典〉たりうるか?—リベラル・アーツの可能性に向けて—』武蔵野書院)

武藤那賀子 [2018a]:「玉里文庫本古筆源氏物語(鹿児島大学附属図書館所蔵)再考(一)」(鹿児島国際大学「国際文化学部論集 19-2」)

武藤那賀子 [2018b]:「玉里文庫本古筆源氏物語(鹿児島大学附属図書館所蔵)再考(二)」(鹿児島国際大学「国際文化学部論集 19-3」)

【使用本文】 表記は私に改めたところがある。室町時代物語は『室町時代物語大成』（角川書店）、「六条葵上物語」は佐竹昭広編『六条葵上物語』（臨川書院）に、『更級日記』、『平家物語』、謡曲《葵上》は小学館新編日本古典文学全集に、『宝物集』と謡曲《源氏供養》が岩波新日本古典文学大系に、『今鏡』は講談社学術文庫に、『源氏一品経表白』『源氏物語表白』が『無名草子 注釈と資料』（和泉書院）の「物語評論 本文と注釈」に、それぞれよった。また玉里本『源氏物語』は、『源氏物語』原本データベースを参照した。

([https://genjiito.org/update/genjigenpon database/](https://genjiito.org/update/genjigenpon_database/))

※本稿は、科研費・課題番号：21K00319（研究代表者：武藤那賀子）の成果の一部である。

（たかぎ・まこと／本学教授）